2015年度事業報告書

公 益 財 団 法 人　東 洋 文 庫

2015年度　公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人　東　洋　文　庫
理事長　槇　原　　稔

2015年4月1日～2016年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事　業　項　目

Ⅰ　調査研究……2
Ⅱ　資料収集・整理……15
Ⅲ　研究資料出版……16
Ⅳ　普及活動……17
Ⅴ　学術情報提供……23
Ⅵ　地域研究プログラム……30

Ⅰ. 調査研究

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1)総合アジア圏域研究班

「総合アジア圏域研究(2)」

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野間のまた国際間の比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、欧文電子情報としてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能な特徴ある研究である。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」では、2015-17 年度では、横断的かつ地域比較の方法による総合アジア国際研究シンポジウムを「アジア研究に関する基本的分析概念の検討」を基本テーマとして行う。これは、アジアの各地域に関する基本的分析概念を地域横断的にまた地域比較的に検討する。

これらは、東洋文庫の資料を横断的に検索することを可能とする総合的検索データベース作成の基礎過程をなし、日本を含むアジア研究全体の現状と将来を展望することを目的としている。また、研究成果は、ワーキングペーパーやオンラインジャーナルにおいて発信する。

[研究実施概要]

a) 西アジア研究班がコーディネーターとなり、「イスラーム社会におけるワクフ(寄進)研究」について、中央アジア、南アジア、中国、東南アジア、日本の寄進との比較により、地域横断的、地域比較的に検討する総合アジア圏域研究シンポジウム "Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations" (The Fourth International Symposium of Inter-Asia Research Networks)を開催した。シンポジウムは 2 日間行われ、のべ 64 名の参加者を得た。

b) アジア資料学研究シリーズとして、「東洋文庫所蔵本 紙質調査報告」を開催し、石塚晴通氏が勉誠出版『東洋文庫善本叢書』所収本の料紙調査について報告し、江南和幸氏が東洋文庫所蔵本の 18 世紀ヨーロッパ刊本に用いられた紙の分析結果について報告した。内外の書誌学研究者、図書館職員など 30 名の参加者を得た。

c) 若手研究者の国際的な研究成果発信を支援するため、昨年度に引き続き、国立シンガポール大学出版のポール・クラトスカ氏を招き、セミナー"Writing English paper for English Journal"を開催した。東洋文庫に籍を置く若手研究員をはじめ日本滞在中の中国人研究者等が参加し、クラトスカ氏より英文研究論文の作成について指導をうけた。

d) 総合研究データベース作成とその成果の公開発信への取り組みを本格化するために、総合アジア圏域研究班のもとに、すべての研究班が参加する「研究データベース共同研究グループ」を設置した。そこでは、資料・目録・分類索引・基本語彙・研究論文・地図・写真などを相互的に連結させた総合研究データベースを作成し、検索機能の活用により研究者の需要に応じた課題を導き出すような新たなアジア研究のモデル開発を目指す。今年度は具体的には、情報処理の専門家を招いた研究討論会の開催、『唐代墓誌所在総合目録』のデータベース化などに取り組んだ。

(2)現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(3)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央

研究院や中国社会科学院、ハーバード・エンチン研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

[研究実施概要]

本年度はおもに次年度の国際シンポジウムに向けた準備を進めるとともに、前年度を承けて、各グループの研究活動を以下のごとく進めた。

a) 資料グループは、前年度に引き続き東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソン・パンフレットを整理し、系統的な調査・研究を着実に進めた。

b) 政治グループは、世界第二位の経済大国になった中国について、外交思想、外交戦略、地域戦略、海洋戦略などの変化を検討する研究会やインタヴュー調査を適宜行った。日中関係の現在および将来についても、文献調査・インタヴューなどによって検証した。

c) 経済グループは、「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第 2 部として、毛沢東時代の経済政策と制度を今日的視点から再評価するための研究会を継続した。

d) 国際関係・文化グループは、「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」に関する研究会を、3 回開催するとともに、東洋文庫が所蔵する華字新聞『順天時報』社説目録の作成を行い、2016 年度の刊行に向けた編集作業を着実に進めた。

e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行った。

f) 『モリソンパンフレットの世界 II』(東洋文庫論叢 79)、『東洋文庫蔵汪精衛政権駐日大使館文書目録』を刊行した。

(3) 現代イスラーム研究班

「新中東・イスラーム圏における議会主義の展開と立憲体制を軸とする政治文化に関する総合的比較研究」

国民国家システムが大きく再編を迫られる現代世界にあって、国民国家そのものの限界が叫ばれ、その克服が盛んに議論の俎上に上る世界の趨勢とは別に、ますます強固な枠組みへと移行しつつあるかに見える新中東・イスラーム圏(西アジア、北アフリカ、中央アジア)の諸国民国家において、議会主義と立憲体制が占める位置と役割は、域内諸地域・諸国により、その形態と質を大きく異にしているとはいえ、押しなべて決して小さくはなく、それぞれの政治文化を大きく規定し、特徴づける重要な要因となっている。現代イスラーム班では、新中東・イスラーム圏内の諸国を対象として、その議会主義の展開と立憲体制を巡る諸問題、そしてそこに醸成される政治文化を分析し、それらを相互に比較検討するための土台となる比較の枠組みを構築することを本来的な目標として設定する。

具体的には、世界の当該地域研究において、これまでほとんど用いられることのなかった、或いは本格的かつ体系的な使用が必ずしも十分にはなされてこなかった当該地域諸国の議事録を中心とする議会文書や議会関係文書(議員など関係者の回想録や日記 etc)の整理・分析を通じてそれぞれの地域(国家)に誕生した議会主義をめぐる政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。加えて、こうした作業を進めるにあたって不可欠となる当該地域における現地語関係資料群の収集と整理、データベース化を推進し、日本における関係資料センターとしての充実に最大限の努力を傾ける。

[研究実施概要]

a) 日常的な研究活動は、便宜的に、アラブ、トルコ、イラン、中央アジアの4グループに分かれて、下記の研究会を開催した。

アラブグループ研究会(6 月 20 日、東洋文庫)

岩崎えり奈 (上智大学)「チュニジア革命と地域」、山尾大 (九州大学)「「イスラーム国」の台頭とイラクのセキュリティー・ガバナンス」、石黒大岳 (ジェトロ-アジア経済研究所)「野党の議会戦術にみる議院規則運用の実際:クウェート議会における問責質問(istjwab)をめぐる攻防」

トルコグループ研究会(12 月 6 日、上智大学四谷キャンパス)

上野愛美(京都大学大学院)「トルコ共和国の宗教教育政策:「宗教文化と道徳」科教科書におけるタリーカ、タサウウフの記述の分析から」、宇野陽子(津田塾大学)「2015 年 11 月トルコ大国民議会総選挙(トルコ出張報告)」

b) 各グループが担当地域(諸国)のカウンターパートとの共同研究体制の構築を行い、現地研究者との研究上の交流の緊密化を図るため、下記の海外出張を行った。

○勝沼 聡(慶應義塾大学非常勤講師) 2015 年 10 月 トルコ・アンカラ 中東工科大学・ケンブリッジ大学などが後援した大戦間期中東社会史に関する国際学会での研究発表等

○宇野陽子 2015 年 11 月 トルコ総選挙に関する現地調査

○立花優(北海学園大学非常勤講師) 2016 年 2～3 月 ジョージア(グルジア)国におけるテュルク系住民の政治参加に関する調査

○石黒大岳 2016 年 3 月 クウェートにおける議会運営の実態に関する調査

○吉村武典(NIHU イスラーム地域研究研究員) 2016 年 2～3 月 モロッコ・エジプトにおける資料・研究動向調査

c) グループを横断した共通課題として「近現代の構造変動」を新たに設定した。地域や国別に進展する研究をより深化させるために、地域や国を横断し、またより長期的なタイムスパンのもとで、画期となる事件や事象を、中東・中央アジアさらにはアジア・アフリカ・欧米とも連動する構造変動と連関づけて議論するための研究セミナーを2回開催した。近現代の中東諸国における連続・非連続の両面について検討を進めていく必要性が明らかとなった。

第 1 回(9 月 19 日、広島市立大学)

吉村慎太郎(広島大学)「近現代イランのナショナリズムとイスラーム―『構造変動』を手掛かりに」、長澤榮治(東京大学東洋文化研究所)「アズハルと 2011 年エジプト革命」

第 2 回(3 月 22 日、東洋文庫)

粕谷元(日本大学)「オスマン帝国からトルコ共和国へ:宗教政策に見る連続性と非連続性」、小松久男(東京外国語大学)「近現代中央アジアにおけるイスラームと政治」

d) これまでに収集した史料(とくに議会関係史料)のデータベース化の作業を進めるための打ち合わせを行った。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

(1)前近代中国研究班

①「中国古代地域史研究―『水経注』の分析から―(2)」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』(原典 6 世紀、中国最古の地理書)とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的な方法による研究に挑んでいる。具体的には、これまでの分析でも用いた旧ソ連製(1978 年、 1／100,000)の詳細なランドサット衛星地図および最新の地理的・考古学的情報と、楊守敬『水経注図』と重ね合わせ、近年の考古学資料とともに原典の注文・疏文までを精読し、『水経注』訳注の刊行を目標とする。

河川流域を「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究に大きな影響を与えるものである。

[研究実施概要]

a) これまでの研究から継続して、陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとし、講読を隔週の研究会において実施した。すでに渭水篇訳注上・下巻に続き、2014 年度には洛水・伊水・瀍水・澗水篇の訳注の出版を実行したが、これに続けて巻 16 の穀水以下洛陽周辺の諸水の分析に着手した。洛陽一帯の地域史的発展というこれまでの視点に、近年特に盛んとなっている洛陽都城史研究の成果を加えつつ、さらに詳細な地域

史研究を目指した。

b) 上記の目標を完成するため、穀水等諸水の流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集に努めた。特に、2015 年 12 月 25 日から 2015 年 12 月 29 日の間、研究員 4 名・研究協力者7名、一行計 11 名で中国河南省に出張し、洛陽市とその周辺の穀水とその支流域の河流の状況、沿岸の遺跡・史跡等を調査した。なかでも、水経注で多く言及される漢魏洛陽城の調査に際しては、洛陽市漢魏故城文物保管所を見学したのち、中国社会科学院考古研究所漢魏故城隊の劉涛副研究員の手配により西陽門や太極殿等の主要発掘現場を視察できた。中国出張を含めて、2015 年度の研究活動の成果は 2016 年度以降に継続刊行を予定している『水経注疏訳注　穀水等篇』に反映されるであろう。

②「東アジア都城の考古学的調査・研究(4)」

本研究班では、これまで渤海を中心とした東アジアにおける都城の比較研究を行ってきた。中国における渤海都城の『上京龍泉府』、『西古城』(中京顕徳府比定地)、『東京龍原府』(八連城)などの発掘調査報告書の刊行が進められる一方で、朝鮮半島、ロシア沿海州の渤海の城跡(クラスキノ古城、コクシャロフカ古城など)の発掘調査・研究も進展を見ている。これら各地の渤海古城の報告書やそれらについての研究書が刊行され、資料の蓄積も充実してきている現状から、本研究班では、それらを整理し、綿密に検討することを目的に研究を進める方針である。また、これまでは都城や城跡の構造、機能などの研究にその中心が置かれていたが、本研究ではこれら都城、城跡に付随する墓跡、集落跡、それらの遺跡から出土する遺物についても注目していく予定である。これまで本研究班では 2004 年度に『東アジアの都城と渤海』、2006 年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊してきたが、本研究においては、渤海の墓、土器・陶器・瓦などの遺物についての研究成果を発表し、特に本研究の総括者が関係するロシア沿海州の遺物の科学的分析についても、行っていく予定である。

[研究実施概要]

a) 2015 年度は、中国、朝鮮半島、ロシア沿海州の都城・古城に関する文献の整理と内容の検討、特に上京龍泉府、西古城(中京顕徳府比定地)、八連城(東京龍原府比定地)の発掘調査報告書の検討を行った。ロシア沿海州の渤海古城であるクラスキノ古城の発掘調査の結果、道路状遺構から門扉の軸受け金具とみられる鉄製品が出土し、これまでの日本・朝鮮半島・中国・ロシアの諸都城から出土した軸受け金具の集成を行うため、発掘調査報告書を整理してまとめる作業を行った。

b) 城跡以外の遺跡(墓跡、集落跡など)についての検討を行った。また、それらの遺跡から出土した遺構、遺物について、渤海の中心地である都城の出土遺物との比較検討を行った。

c) b)の成果については、現在研究成果として出版するための原稿を執筆中である。

③「中国社会経済史用語のデータベース化」

東洋文庫で開設当初から行われてきた《歴代正史食貨志訳註》の研究成果を基礎としながら、これに関連して制作した語彙索引、用語集成などを整理し増補して、これを中国社会経済史の用語集成として編集し、データベースとして公開利用に供することを目的とする。すでに『中国社会経済史用語解』(2012)を刊行し、そのデータベースも公開(2014)したが、『宋会要輯稿食貨篇社会経済用語集成』(2007)もデータベースとして近く公開する。

[研究実施概要]

a) 梅原郁氏寄贈の『唐宋元明代政治・社会・経済用語史料』(唐・五代・宋代・元代・明代にわたり、計約 15 万枚)の中から、唐・宋代約 34,000 枚につき、整理、編集をして版下原稿『唐宋編年史料語彙索引』の製作を完了した。

b) 『三台万用正宗:商旅門、律例門、算法門』を中心としながら、その他の元代、明代の各種の『日用類書』の商旅、律例、算法各門を訓読し検討して、社会、経済、法制、算法の用語を採録して解釈を施した。

c) 2016 年度は、①すでに前年度に版下原稿を作成した梅原郁氏寄贈用語索引カード 34,000 枚を『唐宋編年史料語彙索引データベース』として、ホームページ上で公開する。

残る 10 万枚を超えるカードについても、逐次整理と編集、公開のための版下原稿化を進める。②語彙資料の読解、抽出の作業と並行しながら、『三台万用正宗』ほか明代の『日用類書』に対する訳注と語彙整理によって集められたデータによって、既刊の『中国社会経済史用語解』(2012)に対する大幅な増補改訂版を編集する作業に入り、その刊行、公開を 2017 年度に行う。

④「前近代中国民事法令の変遷(2)」

宋代以降の戸婚・田土・銭穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近 20 年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去 8 年間、この方向で研究活動をしてきた。この 8 年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてることが必要であることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

我々の研究班では現在、学部学生・大学院生を対象として中国の法制史料、とりわけ宋代以降の史料を読解するためのハンドブックとして『中国法制史料読解手冊』(仮)という班のメンバーが分担執筆する共著を準備している。これはとかく複雑で特有の形式を伴う史料である中国の法制史料の読み方につき、班メンバーがその情報を提供して、若手研究者の史料読解を手助けしようとするものである。そのため、今年度は定期的に会合を開き、各自の原稿を検討することを始めた。出版は 2017 年度を目標にしている。

加えて、濱島敦俊研究員を中心とした東洋文庫に収蔵されている地方役人文書の輪読会も開始した。

今後 3 年間の研究計画としては、これらの研究成果を踏まえ、さらに引き続き前近代中国の民事法を中心とする中国法体系の特徴をそれぞれの研究員の専門領域である時代やテーマに則して明らかにする研究を進めていく。

(2)近代中国研究班

「戦前・戦中期日本の華中・華南調査の研究」

近代中国研究班では、これまで、戦前・戦中期に日本の各種調査研究機関等が中国で実施した調査の報告書や資料に関する研究を行ってきた。特に近年では、調査対象地域を華北に重点を置いて、改めて「華北」とはいかなる範囲を指すのか、それを規定する要因は何か等、地域概念が曖昧なまま、議論がなされてきたことを指摘してきた。そこで 2015 年度から 2017 年度にいたる研究期間においては、「華北」研究の延長として、「華中」「華南」に関する調査研究を取り上げ、その内容を政治・経済・文化等様々な角度から分析し、改めて「華中」「華南」の地域概念から、戦前・戦中期の日本人の中国認識を明らかにするものである。なお本作業によって、先に取り上げた「華北」概念の再検討が可能となり、新たに近代中国の全体像を再構築することができると確信している。

[研究実施概要]

a) 前期の研究期間において検討地域とした「華北」については、2013 年 12 月に『華北の発見』と題する報告書を出版した。本研究期間でもこれまでの研究方法を継続して、地域研究として発表された「華中」「華南」に関する諸研究に関する研究史整理を踏まえて、膨大な数に上る戦前・戦中期の日本による調査報告類を整理分類した。特に本研究期間の研究メンバーに、「華中」や「華南」を専門的に研究対象としてきた研究者を新たに加えたことにより、より一層深みのある地域史研究を目指すことができた。

b) 上記の目標を完成するため、南京大学や中山大学等、現地で戦前・戦中期の日本側史料を活用している中国人研究者・研究機関との学術交流や実地調査を実施し、「華中」「華南」

地域の実態に関して先端的研究内容を踏まえて把握した。特に香港について専門研究者を招聘し学術交流を推進するとともに、研究メンバーと活発な討論を行った。

c) また「華南」等については、台湾総督府の調査等も大きく関与していると思われるので、台湾の中央研究院近代史研究所から専門研究者を招聘し、学術交流を行った。さらに研究メンバーにより台湾の中央研究院や国史館等で調査を実施した。

d) 『近代中国研究彙報』第 38 号を刊行した。

(3)東北アジア研究班

①「近世朝鮮記録類の総合的研究」

当班では近世朝鮮史研究の基盤形成作業の一環として、これまで戸籍関係資料と帳簿類をはじめとする冊子体の各種公私記録類(しばしば成冊などとよばれた)を対象に、日本国内の大学やその他の研究機関・個人等が所蔵するものについて書誌的ないし歴史学的な視点から調査・研究を継続して進めてきた。このうちとくに後者については、従来全体的な調査がなされたことはなく、そのため日本国内にどのような内容の記録類がどの程度存在するのかさえほとんど未解明であったが、当班によるこれまでの調査によってその全貌がほぼ明らかになりつつある。

本課題は、こうしたこれまでの調査・研究活動の延長線上に位置づけられるものである。戸籍関係資料や冊子体の記録類以外にも、日本国内には近世朝鮮で作成された各種の記録類が存在する。たとえば古文書類や、写本の形で伝わる日記・紀行文・回想録などをあげることができる。しかしこれらについてもこれまで網羅的な調査は行われていない。そこで本課題では、そうした各種記録類の現存状況を確認し、個々の資料の基本的な情報を収集・整理すること、そしてそれらを体系化して解題目録にまとめることをめざす。さらには、そうした作業を踏まえつつ、それらの記録類の史料的性格、あるいはそれらの記録類に基づいた近世朝鮮社会の分析にも歩を進めたい。

[研究実施概要]

a) 冊子体の各種文献記録類については、2009 年度に刊行した『日本所在近世朝鮮記録類解題』の増補改訂版刊行に向けて準備作業を実施した。これまでの調査で得られた各種文献記録類の書誌情報の再整理・再点検をおこなった。また未調査の関連文献所蔵機関等と対象文献記録類のリストアップ作業をおこなった。

b) 日本所在の近世朝鮮古文書や写本の形態で伝存する日記類・紀行文等については、とくに前者について本格的調査に向けての予備調査を実施した。

②「満族関係資料の研究」

本研究メンバーは、いままで清朝満洲語檔案資料に関して研究を実施し、「満文老檔」「旧満洲檔(「満文原檔」)」「鑲紅旗檔」「内国史院檔」等の訳注・出版をはじめとして、世界の満洲語檔案研究をリードする研究成果を公表してきた。今後もその研究を継続したい。また併せて本研究グループ構成員が、1980 年代より現在にいたるまで、中国各地、とくに中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、そしてロシア極東等で調査を行った際に撮影した画像・映像類、当地で収集した資料(パンフレット、地図を含む)類に対する学術的・体系的な整理・研究を実施したい。したがって、本研究では次の二点をおもな課題とし、研究をすすめる。

第一に、清朝満洲語檔案資料、とくに公益財団法人東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗檔」(鑲紅旗満洲都統衙門檔案)に関する研究である。清朝の基底組織たる八旗、とくに「八旗満洲」の存在は、その国家構造を考える際きわめて重要であることは言を俟たない。「鑲紅旗檔」は、雍正元年の衙門創立から清末まで約 300 年にわたる公文書群で、一八旗都統衙門の文書がこれほどまとまって保存されているのはほかに例をみない。本研究グループは、この文書に対してすでに数多くの研究成果を公にしているが、それらの成果を総括する「研究篇」(英文)の作成をめざし、グループで研究を続けている。本研究はまずこの研究を継続して実施したい。

第二に、いままでグループ構成員が実施した、中国東北部をはじめとする調査の画像・映

像資料等に対する整理・研究である。近年の中国経済発展はめざましいものがあるが、その一方で開発にともなう環境の変化が社会問題ともなっている。文化財および歴史的景観についてもそれは例外でなく、観光開発と称する遺跡破壊や現状変更は、中国いたるところで起こっている。その変化は2000年を超えてからより顕著となっており、いまでは回復不可能なものも数多く存在する。本研究グループ構成員は、1980 年より現在にいたるまで、ほぼ毎年中国東北部の満族関係遺跡・文化財を中心として調査を実施してきたが、それらの調査によるデータ・資料が相当数蓄積されている。これらの資料は、いうまでもなく、現在の中国ではほとんどみることのできない貴重なものである。本研究では、一の「鑲紅旗檔」研究に加え、本研究グループ構成員が中国各地で集積した満族(清朝)関係の画像・映像データ、そしてパンフレット、地図等の資料を、体系的に整理・研究をしようとするものである。

[研究実施概要]

東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗満洲都統衙門檔案」に関する共同研究を継続して実施し、それとともに、研究メンバーが1980年代より中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、そしてロシア極東等の地で調査を実施した際に撮影・収集した主として満族(清朝)関係資料について整理・研究する。これらの資料については、デジタル化を進めるとともに、データベース化と目録化を進めた。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析:政治・社会・経済・民族・文化の展開」

中国では内外政治・経済・民族を中心とする国家事業を急進させるなか、長期間に亙って内在していた政治・経済・民族・文化の問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。清朝は所謂「北京京師体制」を拡充させることで清代諸領域における歴史的構造としての特徴を確立し、政治・経済・民族・文化の問題としてさまざまな展開をみせてきた。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題もまた現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。本研究班におけるこれまでの成果を基盤にして、刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と政治・社会・経済・民族・文化の展開における諸関係を分析する上で特に不可欠となる官撰文献ならびに檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、読解、デジタル化し、向後の研究に広く貢献していきたい。

[研究実施概要]

a) 2016 年度に【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』1／清朝初期政治史研究(1)】、2017 年度に【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』2／清朝祭祀儀礼研究(1)『壇廟祭祀節次』】を出版する計画を立て、2015 年度にはそのための準備を進めて予想通りの成果を得た。しかし、その過程で新たな研究上の大きな課題が明らかになったことにより、この課題について早急に対応するべく、次なる計画に従って引き続き準備を進める。

b) 写真で蒐集した史料の一部を既に公開したことに続き、清代政治・経済・民族・文化の各専門研究領域をもとに、海外における図書館・檔案館・研究機関等に所蔵されている檔案文献史料類のマイクロ=フィルム方式や新たなデジタル化方式による整理・分析作業を進める計画予定であったが、日中関係が悪化した現状等を背景とする諸般の事情で2015 年度には予定通りには進めることができなかった。引き続き、年度を改めて継続する。

c) 上記の新規蒐集史料と密接な東洋文庫収蔵の文献資料類を新たに検討し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開する計画の一環として、東洋文庫所蔵の祭祀儀礼資料類を総合分析することによって、従来みられた清朝の国家支配構造をめぐる研究アプローチとは全く異なる、デジタル手法の導入による資料検証ならびに清朝宮廷

儀礼の復元作業を、新たな長期研究課題として 2015 年度に設定した。時間を要する課題のため、この長期研究課題そのものについて 2015 年度に立てた研究実務上における短期・中期・長期の 3 段階の研究事業計画を進めたが、さらにこれに沿って引き続き年度を改めて対応を進める。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(3)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006 年度までに、室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(Ⅰ～Ⅴ)を公刊したが、その後も、近世期の成立、ないしは刊行の貴重書について調査を行い、その書誌解題を広く公開してきている。2009 年度刊行の『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅵ』と、2012 年度刊行の『同Ⅶ』において歌書を中心とした解題を公刊した。今後さらに草子類についての調査と解題刊行を継続して、岩崎文庫所蔵の貴重書の研究基盤を整備し、その資料的価値を周知して行きたい。

[研究実施概要]

a) 上記の『岩崎文庫貴重書書誌解題』のⅠ～Ⅶに引き続き、2015 年度には、岩崎文庫の内から、江戸期成立・刊行の絵入り本(奈良絵本・仮名草子丹緑本ほか)47 点について、書誌調査を行い、分担して書誌解題を執筆し、研究会を催して検討の上、第Ⅷ輯として公刊した(『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ 東洋文庫絵本コレクション』)。とくにそのうちの奈良絵本 19 点については、本文の翻字を掲載した。

b) さらに『岩崎文庫貴重書書誌解題』の第Ⅸ輯として、絵入りでない草子類の書誌解題につき、企画検討・調査に着手した。第Ⅸ輯は 2018 年度に公刊の見込みである。

2. 内陸アジア研究部門

(1) 中央アジア研究班

①「古ウイグル語および関連諸語古文献に関する研究」

本研究は、サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー(RAS)東洋写本研究所(IOM)に蔵されているセリンディア・コレクション(SIC)の中で、東洋文庫にマイクロフィルムとしてもたらされた古ウイグル語を中心とする古文献について、2014 年度までに作成した仮目録(カタログ)第 2 版を基礎としながら、次のような目的を果たそうとするものである。

古ウイグル文献と、それに関連する中央アジア地域の諸言語によって書き残された古文献は、世界各地の所蔵機関や国際的な連携組織(例えば国際敦煌プロジェクト＝IDP)などの努力により、次第にその全容が把握できるようになり、同時に、個別の文書研究の蓄積も増大してきた。これらに基づき、(1)多くの出土古文献に関する古文書学的特徴について、従来のデータをさらに充実させる。(2)また漢文面(主に仏典)の内容をも参考にしながら、多くの断片をつなぎ合わせ、古文書群の系統研究をおこなう。(3)古文献の読解によって内容研究をすすめ、とりわけ古代・中世期の中国・インド・中央アジアにまたがる地域の言語・文化とその担い手たちの実態・交流・変容・歴史の解明に寄与する。(4)なお、古文献断片のつなぎ合わせ研究を、別の角度からみて、19～20 世紀の中央アジア地域における諸国探検隊の活動の実態を解明する手がかりを探求する。

[研究実施概要]

a) 古文書学的データを確定するために、サンクトペテルブルグの IOM において現物調査をおこなった。

b) 仮目録第 2 版の校訂を文庫内部データベースの上で不断に行い、5,600 点ほどの断片類の詳細を、文字種類・言語種類・内容について検討した。また、サンクトペテルブルグの SIC グループと面談のうえ、目録各断片の寸法に関するデータの提供を依頼した。漢文面の仏典情報を手がかりに、断片の接合関係を明らかにした。

c) 古文献の内容に関する個別研究、比較研究を、サンクトペテルブルグ所蔵のものに限定

せずに、メンバーが個別および共同で広く行い、成果を個別論文として公刊した。

d) 出土古文献に関する諸情報を共有するために、京都の龍谷大学のメンバーと研究打ち合わせをおこなった。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族」

ソ連解体(1991年)以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や現地調査も可能になったことは決定的な意味をもっている。こうした研究環境の変化をうけて、本研究は次の二点をおもな課題とする。

第一に、中央ユーラシア地域は、19 世紀後半からロシア帝国や清朝の統治下で近代を迎え、その過程でイスラームの改革を志向する潮流と既存のイスラームを固守する潮流との緊張関係が高まり、ほぼときを同じくして民族的な覚醒が進行した。こうした動きは同時代の新聞や雑誌などの定期刊行物やロシア当局のアルヒーフなどから分析することができるが、イスラーム改革と民族的な覚醒との相互関係は十分に解明されているとは言えない。この問題は後のソ連時代および現代の動向、とりわけイスラーム復興と新しいナショナリズムとの相関を考える上でも重要であり、本研究はまずこれに注目したい。

第二に、近現代中央ユーラシアにおけるイスラーム改革と民族的な覚醒は、いずれも帝国の体制や秩序とムスリム社会との相互関係あるいは緊張関係を背景として生まれたものであり、また同時代のオスマン帝国やイラン、インドなどのイスラーム地域における政治社会運動の影響も無視するわけにはいかない。さらに、その後の社会主義体制がもたらしたイデオロギーや社会変容の影響は、それ以上に重要である。ソ連解体後においては民族の別を越えたグローバルなイスラーム復興の潮流が浸透する一方で、新独立国家のナショナリズムと結びついたイスラームがこれに対抗するような構図も生まれている。本研究では、このような多様な要因に留意しつつ、イスラームと民族の相互関係について総合的な理解をめざしたい。

[研究実施概要]

a) 近現代中央ユーラシアのイスラームに関する資料調査と専門研究者との意見交換のためにウズベキスタン共和国のタシュケントに出張し(2016年3月14−19日)、研究資料を収集するとともに現地における最新の研究動向を知ることができた。

b) 近現代中央ユーラシアで刊行されたロシア語を含む中央ユーラシア諸語による定期刊行物は、これまでの収集活動によって東洋文庫にも少なからず所蔵されており、これを積極的に活用して研究を進めた。

c) 東洋文庫を拠点に内外の研究者の参集を得て、下記のとおり中央ユーラシア研究会を開催し、最新の研究成果を共有しながら研究を推進した。

Vladimir Bobrovnikov (モスクワ東洋学研究所研究員) "Godless Imagination of Islam" in the Inter-War Soviet Posters, 1918-1940(2015年9月10日)

Daniel Prior (Associate Professor of History, Miami University)"The Bard Sagymbai Orozbaq uulu and His Place in the Kirghiz Epic Tradition"(2015年12月17日)

Tohir Kalandarov (ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所) "Памирские исмаилиты: между прошлым и будущим(パミールのイスマーイール派—過去と未来の間で)"(2016年1月23日)

③「敦煌・吐魯番資料に見る多元的宗教社会の研究」

当研究班は「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」計画にもとづき、漢語文献の整理把握に努めてきた。その結果、非仏典漢語文献の集約はほぼ完了し、現在計画中の「敦煌吐魯番論集」に成果を報告することで一区切りをつける段階を迎えた。これをふまえ本研究では、改めて敦煌吐魯番文書資料研究の原点に立ち戻り、また近年新たに発見、整理された資料も積極的に取り込みながら、その時代と社会の特質や構造の解明に取り組むことを計画している。

敦煌文書や吐魯番文書の時代は仏教が社会に浸透し、人々の日常生活や風俗、社会の

規範などを規定したことが知られている。文書中には膨大な仏典が残され、地域には信仰の対象となる石窟や寺院が確認される。またマニ教やゾロアスター教や道教などの存在も見過ごすことはできない。本研究はそうした多様な宗教が息づいた時代性を意識しつつ、その時代が生み出した諸資料を柔軟に取り上げるが、そのことは同時に、欧米や中国で高まる同時代研究の動向にも対応するものである。

なお当研究班は、長年にわたり戸籍や契約文書などの非仏教社会経済文献研究で実績をあげてきており、今後もこれを重要な柱とすることは変わらない。その上で、宗教や文化の領域とも接点をもち、また中堅若手研究者も加えて、研究のすそ野を広げていく。

[研究実施概要]

a) 近年、敦煌・吐魯番文書を中心とする内陸アジア出土の漢語文献資料の報告書や研究論文が相継いで出版された(『新獲吐魯番出土文献』(中華書局、2008 年)、『新疆博物館新獲文書研究』(中華書局、2013 年)など)。それらの報告や研究の集約と整理を進め、文献目録および文書資料集の整理・作成を進めた。また石窟や石刻資料について新出資料の公表や新情報の入手された場合には、すみやかに共同で議論する場所を用意し認識を深めた。

b) 国内では、杏雨書屋蔵『敦煌秘笈』全 10 冊や寧楽美術館蔵『吐魯番文書』などを始めとして、諸機関に所蔵される文書について、仏経関係文書も含めて系統的な把握に努めた。また整理と並行して資料の読解、翻訳を試みた。

c) 前計画で進めたサンクトペテルブルク所蔵の漢文文献の整理に関わって、なお部分的に残された資料整理とその公表に協力した。

d) 上記諸項目は共同研究の形をとって進め、若手研究者にも研究メンバーとして積極的に加わってもらい、当該領域の幅を広げることに努めた。研究班はこれまで続けてきた「漢語文書輪読会」を定常化させ、また定期的に開催した「内陸アジア出土古文献研究会」の一層の活発化をはかった。

e) 研究計画では研究成果の公表の場としてシンポジウムを行う予定であったが、シンポジウムの開催は実施できなかった。しかしその成果の一つとして、研究員である土肥義和・妹尾達彦・片山章雄の三人が、2015 年度前期東洋学講座として、7 月 22 日、7 月 27 日、8 月 3 日の三日間にわたって講演会を行った。その報告要旨は『東洋学報』第 97 巻第 4 号に掲載された通りである。

(2)チベット研究班

「チベット語文献資料の基礎研究」

(1)新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかる。(2)とくに河口慧海請来文献の電子テキスト・データベースを作成し、公開する。(3)敦煌チベット語文献、河口慧海請来文献、新たに収集した文献を含む東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献の写本校訂と訳注研究を行い、成果を刊行する。(4)以上の 3 点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指す。

[研究実施概要]

a) 資料収集:近年中国・インドなどで新たに発見された 10～13 世紀のチベット語写本の影印版収集を継続した。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかった。

b) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を実施した。

1. 筆記体写本の校訂:河口慧海請来文献の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキスト・データベースを作成した。
2. 1 のデータベースをもとに文献の分析・研究を実施した。
3. 中央アジア出土チベット語文献の研究を行い、武内紹人研究員を中心に中央アジア出土文献研究シリーズの第 2 巻"*Tibetan Texts from Khara-khoto in The Stein Collection of the*

British Library"を刊行した。

4. チベットの文学について、星研究員を中心に研究を行った。

3. インド・東南アジア研究部門

(1)インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究(2)」

インド(南アジア)の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究においての根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

[研究実施概要]

a) 東洋文庫に所蔵のない史料・遺跡について、現地で調査した。とくに、研究メンバーの一人が2016年3月に南インドで調査を行い、カルナータカのダールワーダにおいて行われたインド刻文学会に関して、近年の研究動向の情報と関連文献の収集につとめた。

b) 研究班メンバーおよびインドの研究協力者が共同し、古代・中世の国家構造と社会統合を、インドにおける南北文化の歴史的相違と関連させて考察した。インド史研究者との交流を行い、全体的な研究の進展を図った。

c) "*Medieval Religious Movements and Social Change: A Report of a Project on the Indian Epigraphical Studies*" を刊行した。また、2013 年度に東南アジア研究班と共同で行なった国際シンポジウム State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia の英文報告書の出版への整理を行った。

(2)東南アジア研究班

「近現代東南アジア史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第 2 次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この 40 年間に飛躍的な発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目されてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な史料となりうる。本研究は、日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の観点からその記述を検討し、日本人を始め中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した 20 世紀前半期の東南アジア都市の特質について研究する。合わせて前近代や現代の東南アジアの都市との比較研究を行い、社会統合や広域ネットワーク形成に果たすその歴史的役割を検討したい。

[研究実施概要]

a) 研究班のメンバーと関係研究者による研究会を 8 月に開催し、近現代ならびに前近代の東南アジアの都市の成り立ちや住民構成、構築したネットワークの特質について検討した。そうしたなかで植民地期の都市の社会統合が、のちの新生国家の国民統合の基盤を形成した

だけでなく、その後の外来系住民と現地人との確執をはじめ、エスニシティ問題や国籍問題などの背景も醸成したことが明らかとなった。とりわけ 2015 年度には、それまでコスモポリスであった東南アジア諸都市のハイブリッドな空間が、植民地期においてどのように変容したのかに考察の力点をおいた。そのための史料収集や訪問調査を、インドネシアとオランダで行った。これらの成果をまとめて、2017 年度に出版する計画について話し合った。

b) 明治期から第二次世界大戦前夜までの日本の東南アジア関係の文献について、情報を整理し、そのデータベース化を進めた。合わせてそれらの文献の特質について検討した。そのデータベースならびに検討結果をまとめて、2017 年度に出版する計画について話し合った。また東洋文庫が所蔵する故仲田浩三氏の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。それらは、前近代の都市の役割を検討するための重要な資料であり、その目録刊行を 2017 年度に行うことを話し合った。

4. 西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム地域の比較制度研究」

イスラーム地域の文書史料(土地台帳・財務帳簿・勅令などの行政文書、イスラーム法廷文書、ワクフ文書、契約文書など)、叙述史料(年代記、地誌、伝記集など)、法令・法学書をもとに、社会制度や規範の地域間(アラブ、イラン、トルコ、中央アジア)の比較研究をすすめ、イスラーム地域の社会システムの共通性と異質性、および歴史的変化を明らかにする。日本からの研究発信であることを重視し、中国や日本社会との比較の視点に留意し、東洋文庫の他の研究班との研究交流をすすめる。

研究活動としては、前期(イスラーム世界の契約)につづき、ワクフ研究およびヴェラム(モロッコの契約文書)研究を二つの柱とする。ワクフや契約の基盤となる法制度、行政組織、社会関係についても広く研究をすすめる。

NIHU イスラーム地域研究東洋文庫拠点の研究活動と連携し継承し、国内の文書研究プロジェクト(京都外国語大、東京外国語大アジア・アフリカ言語文化研究所など)、および海外の研究機関(フランス CNRS、ウズベキスタン科学アカデミーなど)や研究者と連携し、国際的なネットワークを形成する。

[研究実施概要]

a) ワクフ研究 ワクフ(宗教的寄進)は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。個人や家族にとって、財産保全、金融、投資、年金の役割をもち、その現代的な意義も注目されている。フランス CNRS 国際共同研究(GDRI)と連携し、2015 年 12 月には、総合アジア圏域研究班により、「ワクフ(寄進)の比較:東方から Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations」を開催し、中央アジア、南アジア、中国、東南アジア、日本の寄進との比較により、一族の財産継承と融資と慈善という共通性とともに、英仏の植民地統治下での変容が明らかとなった。また、イランのイマームレザー廟のワクフ資料の校訂出版の準備を進めた。

b) ヴェラム文書研究 東洋文庫が所蔵するヴェラム文書(皮紙に書かれたモロッコの契約文書、16-19 世紀)について、2014 年度に 8 点の文書(1989 年購入)のアラビア語テキスト校訂と解題・研究(英文、仏文)を刊行し、売買や相続などの契約、書式や公証人や裁判官の役割、文書の伝世などを明らかにした。2014 年度にあらたに皮紙 11 点、木片 29 点の類似文書を購入し、15 年度には、当該の文書の解読・研究を、月例講読会や研究合宿によってすすめ、モロッコの研究者(Bouchantouf ムハンマド5世大学教授)による校閲点検作業も行った。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究(2)」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

[研究実施概要]

a) 台湾中央研究院歴史語言研究所から提供を受けている漢籍文献資料庫の運営、及び同研究所に対する資料提供の業務を遂行した。資料庫の利用頻度は、2012 年度 423 回、2013 年度 387 回、2014 年度 106 回と低調に推移してきたが、2015 年度は、733 回と急伸した。今後も更なる利用を期待したい。また、中国人民大学副教授呉真博士を招聘し、日本国内の民俗祭祀に関する現地調査(将来、データベース構築)を共同して行った。

b) モリソンパンフレット、歴史の部 1,528 コマ(3,056 頁)を Website に公開した。

c) 東アジア全域(中国、韓国、日本)の祭祀資料の現地調査を続行しているが、報告書の刊行よりもデータベースの構築を優先させたい。

D. 各種研究会・講演会開催

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研究会数	4	10	5	5	4	6	5	7	6	7	3	6	68
参加人数	41	79	89	156	81	116	49	169	132	93	50	73	1,128

Ⅱ. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区　分	和漢書	洋　書	その他
総合アジア圏域研究	0 冊	1 冊	0 件
超域・現代中国研究	164 冊	13 冊	0 件
超域・現代イスラーム研究	0 冊	545 冊	0 件
東アジア研究	487 冊	5 冊	0 件
内陸アジア研究	13 冊	64 冊	0 件
インド・東南アジア研究	0 冊	41 冊	0 件
西アジア研究	0 冊	230 冊	0 件
共通（継続・大型資料）	1,117 冊	212 冊	0 件
合　計	1,781 冊	1,111 冊	0 件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区　分	受　贈				寄　贈		
	和漢書	洋　書	その他	計	和漢書	洋　書	計
単行本	1,000 冊	169 冊	17 冊	1,186 冊	210 冊	462 冊	672 冊
定期刊行物	1,296 冊	281 冊	0 冊	1,577 冊	2,719 冊	0 冊	2,719 冊
計	2,296 冊	450 冊	17 冊	2,763 冊	2,929 冊	462 冊	3,391 冊

C. 資料保存整理

2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫菌害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復を行った。本年度はモリソン文庫・山本文庫を中心とする洋書古典籍並びに岩崎文庫を中心とする和漢古典籍の作業を行った。

・逐次刊行物合冊製本（外注）	281 点
・修理・修復（破損による再製本を含む）	
洋　書	247 点
和漢書	111 点
・簡易補修	352 点
・保存容器	109 点
・マイクロフィルム劣化防止作業	28 件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)　第 97 巻第 1～4 号　A5 判　4 冊(刊行済)

2. 『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
No.73　B5 判　1 冊(刊行済)

3. 『近代中国研究彙報』　第 38 号　A5 判　1 冊(刊行済)

4. 『東洋文庫書報』　第 47 号　A5 判　1 冊(刊行済)

5. *Modern Asian Studies Review*(新たなアジア研究に向けて)
Vol.7　A4 判　1 冊(刊行済)

6. *Asian Research Trends New Series*　No.10　A5 判　1 冊(刊行済)

B. 論叢等出版

1. *Tibetan Texts from Khara-khoto in The Stein Collection of the British Library*
(*Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia, Vol.2*)　B5 判　1冊(刊行済)

2. 『モリソンパンフレットの世界Ⅱ』東洋文庫論叢 79　B5 判　1 冊(刊行済)

3. 『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ－東洋文庫 絵本コレクション』　B5 判　1冊(刊行済)

4. *Medieval Religious Movements and Social Change: A Report of a Project on the Indian Epigraphical Studies*　B5 判　1 冊(刊行済)

5. 『東洋文庫蔵汪精衛政権駐日大使館文書目録』　B5 判　1 冊(刊行済)

Ⅳ. 普及活動

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

(前　期)共通テーマ「漢語資料を通じて見た内陸アジアの諸民族」

第 548 回 7 月 22 日(水)
「大宋沙門道圓三蔵の西域求法の旅」
東洋文庫研究員
國學院大学名誉教授　　土肥義和　氏

第 549 回 7 月 27 日(月)
「シルクロードと長安のソグド人」
東洋文庫研究員
中央大学教授　　妹尾達彦　氏

第 550 回 8 月 3 日(月)
「フィンランド・マンネルヘイム収集の新疆資料と日独露仏の探検隊」
東洋文庫研究員
東海大学教授　　片山章雄　氏

(後　期)　共通テーマ「医学・医療史からみる東洋と西洋」

第 551 回 11 月 25 日(水)
「東洋医学・漢方　―「肩こり」と「冷え」について―」
東北芸術工科大学教授　　白杉悦雄　氏

第 552 回 11 月 26 日(木)
「〈医学の書物〉と〈書物の医学〉　―初期近代ヨーロッパの新しい医学と現在における発展―」
慶應義塾大学教授　　鈴木晃仁　氏

第 553 回 11 月 27 日(金)
「東洋と西洋の接触　―蘭学における医学の意味を〈藤井文庫のコレクションから〉再考する―」
東洋文庫研究員
神戸大学大学院教授　　塚原東吾　氏

2. 特別講演会

9 月 10 日 (木)
「"Godless Imagination of Islam" in the Inter - War Soviet Posters, 1918–1940」
モスクワ東洋学研究所研究員　　Vladimir Bobrovnikov 氏
〔英語・通訳なし〕

9 月 29 日 (火)
「ソグド人と河西回廊ー資料と問題ー」
蘭州大学歴史文化学院教授
同敦煌学研究所副所長　　馮　培紅 氏

12月17日（木）
「The Bard Sagymbai Orozbaq uulu and His Place in the Kirghiz Epic Tradition」
Associate Professor of History, Miami University
Daniel Prior 氏
〔英語・通訳なし〕

1月23日（土）
「パミールのイスマーイール派：過去と未来の間で」
ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所研究員
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
トヒル・カランダロフ 氏
〔ロシア語・通訳あり〕

2月19日（金）
「以藝會友：南宋中期士人以〈蘭亭序〉為中心的品題與人際關係」
台湾中央研究院歴史語言研究所研究員
長庚大学教授
東洋文庫名誉研究員　黄　寛重 氏
〔中国語・通訳あり〕

3. 東洋文庫談話会
3月23日（水）
「南宋四明史氏の斜陽―南宋後期政治史の一側面―」
熊本大学准教授　小林　晃 氏

3月24日（木）
「明清時代の纏足と大脚―脚に示されたステイタス」
日本学術振興会特別研究員（PD）　五味知子 氏

3月24日（木）
「高昌故城とその周辺遺跡：
ドイツ・トルファン探検隊調査遺跡同定と遺跡データベースの構築」
花園大学専任講師　西村陽子 氏

4. 公開講座
4月29日(水)、5月6日(水)、23日(土)、24日(日)、7月26日(日)、8月1日(土)
ワークショップ「科学と歴史のコラボレーション　魔法のペンで光る地図をつくろう！」

(大地図展　―フェルメールも描いたブラウの世界地図―)
6月6日(土)
「グレートジャーニー：地球を歩いて気づいたこと」
武蔵野美術大学教授・探検家　関野吉晴 氏

6月14日(日)
「17世紀オランダ美術における"アジア"」
国立西洋美術館研究員　幸福　輝 氏

6月20日(土)
「Mapping from the Water: Joan Blaeu and the Selden Map」
ブリティッシュコロンビア大学教授　ティモシー・ブルック 氏

6月21日(日)
「東洋文庫蔵ジョン・セーリスの航海日記からみる江戸初期イギリス商館の活動」
ロンドン大学 SOAS 教授　　タイモン・スクリーチ　氏

6月28日(日)
「フェルメールはなぜ地図を描いたのか—17世紀オランダの「世界」像をさぐる」
目白大学教授　　小林頼子　氏

8月2日(日)
「Global Cultural Exchange between West and East: Mediating European Art Through Company Channels in Asia」
グライフスヴァルト大学教授　　ミヒャエル・ノルト　氏

8月23日(日)、10月25日(日)
ワークショップ「科学と歴史のコラボレーション　魔法のペンで行燈づくり！」

10月1日(木)
ジュニア研究員プログラム「夢は研究者！～平野博士にきく歴史の魅力」
東洋文庫普及展示部長　　平野健一郎　氏

〈幕末展〉
10月4日(日)
「幕末長崎の交流と明治産業革命遺産」
長崎歴史文化博物館研究員　　岡本健一郎　氏

10月15日(木)
ジュニア研究員プログラム 「今日は自然博士の日！シーボルトの植物図鑑、ぼくの植物図鑑」
小岩井農牧株式会社環境緑化部部長　　足澤　匡　氏

〈幕末展〉
10月22日(木)
「薩摩藩留学生と五代友厚」
鹿児島県立図書館館長　　原口　泉　氏

11月3日(火)、12月20日(日)
ワークショップ「はじめての製本体験」

11月5日(木)
ジュニア研究員プログラム「本ってどうやってつくるの？手作り製本体験」

11月19日(木)
ジュニア研究員プログラム「ミュージアムお宝探し！教科書スターのホンモノ発見！」

12月3日(木)
ジュニア研究員プログラム「ミュージアムの裏側をみよう！学芸員のお仕事体験」

12月5日（土）・6日（日）《総合アジア圏域研究国際シンポジウム》（使用言語：英語）

「Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations」

Opening Address

HAMASHITA Takeshi (Research Department Head, Toyo Bunko) Opening Address

MIURA Toru Keynote Speech

Session 1: Benefit

Moderator: OKAWARA Tomoki (Research Fellow, Toyo Bunko; Associate Professor, Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University)

KONDO Nobuaki (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies)

"State and Shrine in Iran: Waqf Administration of the Shah 'Abd al-'Azim Shrine under the Qajars"

Musa SROOR (Director of History and Archaeology Department, Director of Master Program in Muslim and Arab History, Professor, Birzeit University)

"The Waqf and Building the Cities: The Old City of Jerusalem as a Case Study"

ISOGAI Kenichi (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Faculty of International Liberal Arts, Otemon Gakuin University)

"Waqf as a Sustainer of Educational Activity: A Sixteenth Century Waqf for a Bukharan Madrasa"

Ouddène BOUGHOUFALA (Professor, Humanities Department, Mascara University)

"Women's Waqf and their Social Role in Ottoman Algeria"

Session 2: Networks

Moderator: Stefan KNOST (Lecturer, University of Halle-Wittenberg)

Joseph P. McDERMOTT (Fellow of St. John's College and Emeritus Reader of Chinese History, Cambridge)

"Village Institutions: Their Development and Potential in China during the Ming and Qing Dynasties"

TAKAHASHI Kazuki (Professor, Musashi University)

"Land Donation in Medieval Japan and its Social Function"

KHOO Salma Nasution (Author, Areca Books, Penang, Malaysia)

"Waqf and Social Patronage among Tamil Muslim Diaspora in the Straits Settlements of Penang"

Nacereddine SAIDOUNI (Professor Emeritus, University of Algiers)

"The Awqâf of Maghrebis in Cairo and Jerusalem: Spiritual Links, Cultural Exchanges, and Economic Necessities (Through a Sample of Maghrebis' Waqfiyât in al-Azhar and al-Aqsa Mosques)"

Discussion

Session 3: Transition

Moderator: Randi DEGUILHEM (Professor, CNRS, TELEMME-MMSH/AMU, Aix-en-Provence)

Saiyid Zaheer Husain JAFRI (Professor of Medieval Indian History, Department of History Faculty of Social Sciences, Delhi University)

"Familial Grants and Making of a Waqf: A Case Study of Khanqah-e Karimia, Salon (in Northern India) from Mughal to the Modern Times AD.1679-1953"

Randi DEGUILHEM (Professor, CNRS, TELEMME-MMSH/AMU, Aix-en-Provence, Director of GDRI CNRS International Research Network on Waqf and codirector of IISMM-EHESS seminar on waqf)

"Colonial States Claiming Waqf, A Transregional Approach: From the French and British Near East to British India"

Tunku Alina ALIAS (Adjunct Professor, University of Miami Law School; Adjunct Research Fellow, International Centre for Education in Islamic Finance (INCEIF) KL)

"The Spread of Waqfs following British Colonial Trade in the Indian Ocean: A Comparison with the Atlantic Trade"

Discussion

Closing Session:

Discussant Jean-Pierre DEDIEU (Senior Researcher (emeritus) CNRS, Framespa, Toulouse/IAO (Lyon)

General Discussion

Randi DEGUILHEM Concluding Remarks

12月17日(木)

ジュニア研究員プログラム「斯波博士が歴史まんがのウソをみぬく！」

東洋文庫文庫長　斯波義信 氏

12月18日(金)《内陸アジア研究部門中央アジア研究班国際学術会議》(使用言語：英語)

「International Conference on "Xinjiang in the context of Central Eurasian transformations" 」

Opening Remarks

Session 1

Chair: David Brophy (The University of Sydney)

Rian Thum (Loyola University)

"Moghul Relations with the Mughals: Economic, Political, and Cultural"

Onuma Takahiro (Tohoku Gakuin University)

"Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: A Case of Altishahr in the Seventeenth and Eighteenth Centuries"

Matthew W. Mosca (University of Washington)

"Cišii's Writings and Their Context: An Unofficial Source among Networks of Officials"

Session 2

Chair: Naganawa Norihiro (Hokkaido University)

Rune Steenberg (Columbia University)

"Qing Policies and Close Marriage: Transforming Kinship in Kashgar"

Noda Jin (Waseda University)

"The Crossing of Imperial Borders and "International" Conflict Resolution between Russian Turkestan and Qing-ruled Xinjiang"

Unno-Yamazaki Noriko (University of Tokyo / Harvard-Yenching Institute)

"Cooperation and Opposition: The Relationship between Turkic Muslims and Chinese-speaking Muslims in the Early Twentieth Century"

12月19日 (土)

「毛沢東時代の経済政策を振り返る」

大東文化大学名誉教授　小島麗逸 氏

〈解体新書展 ーニッポンの「医」の歩み1500年ー〉

1月9日(土)

「東洋文庫収蔵の医学史コレクションについて―＜からだ＞と＜いのち＞の知、東西交流の軌跡」

東洋文庫研究員　塚原東吾 氏

〈アジア資料学研究シリーズ 2015 年度コディコロジー研究特別報告会「東洋文庫所蔵本 紙質調査報告」〉

1 月 26 日(火)

「東洋文庫 18 世紀ヨーロッパ刊本に用いられた紙の分析」

東洋文庫研究員
龍谷大学名誉教授　江南和幸 氏

「東洋文庫善本叢書所収本の料紙調査報告」

東洋文庫研究員
北海道大学名誉教授　石塚晴通 氏

〈解体新書展 ―ニッポンの「医」の歩み 1500 年―〉

1 月 31 日(日)

「『解体新書』その魅力と注目すべきこと」

順天堂大学名誉教授　酒井シヅ 氏

2 月 20 日(土)

「日中医学交流秘話―1950 年代の医学者の相互訪問をめぐって」

青山学院大学教授　飯島 渉 氏

3 月 5 日(土)

「絶学の人―解体新書の画家・小田野直武と秋田蘭画」

学習院女子大学教授　今橋理子 氏

5. 普及展示企画

東洋文庫ミュージアムにおける展示企画について、展示テーマ、展示品の検討を重ねた。

6. 参考情報提供

『東洋文庫年報』 2014 年度版　A5 判　1 冊(刊行済)

B. データベース公開

2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料の通りである。

C. 海外交流

以前より研究協力協定を締結しているフランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン図書館、ハーバード・エンチン財団、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)図書館に加え、ベトナム社会科学院漢喃研究所と協力関係を結んだ。

また、12 月 5 日(土)・6 日(日)に≪総合アジア圏域研究国際シンポジウム≫として、"Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations" (The Fourth International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催した。

V. 学術情報提供

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
閲覧者人数	191人	202人	204人	185人	253人	177人	189人	216人	176人	145人	205人	233人	2,376人
閲覧図書数	2,313冊	2,515冊	1,899冊	2,275冊	3,407冊	2,540冊	2,340冊	3,086冊	2,167冊	2,150冊	3,665冊	3,262冊	31,619冊
レファレンス数	52件	55件	55件	50件	68件	48件	51件	58件	48件	39件	55件	63件	642件

B. 研究資料複写サービス

	申し込み件数	焼付枚数
マイクロフィルム・紙焼写真	152件	
電子複写	1,016件	33,903件

C. 研究情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期した。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から、毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。

b) 企画展は一年に3回の頻度で行っている。本年度は以下の企画展を実施した。

①「もっと知りたい！イスラーム展」(2015年1月10日～4月12日)

②「大地図展～フェルメールも描いたブラウの世界地図～」(2015年4月22日～8月9日)

③「幕末展」(2015年8月19日～12月27日)

④「解体新書展　ーニッポンの「医」の歩み1500年ー」(2016年1月9日～4月10日)

c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。

d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。

Ⅳ.普及活動－4.公開講座 を参照

e) 六義園特別展示「六義園をめぐる歴史」を開催した。

会期:①2015年3月18日～4月6日　②2015年11月11日～12月7日

会場:東洋文庫ミュージアム1階オリエントホール

f) 小岩井農場での出張展示「時空をこえる本の旅:東洋文庫の世界」を行った。

会期:2014年11月～2015年5月

会場:小岩井農場資料館

5. ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は毎日15時に開催している)。

6. 学校連携

a) 東京藝術大学との協力協定により、記念コンサートを何度かミュージアム内にて開催し、多数の来場者を得た。

b) 成蹊大学図書館との協力協定により、東洋文庫の貴重書を大学図書館入口にて常設展示した。

c) 東京都歴史教育研究会「教科指導法研修会」を実施した(8月27日)。

d) 筑波大学附属視覚特別支援学校　中学部　男女各1名に対し、東洋文庫、ミュージアム運営に関する職場体験を実施した(11月27日)。

e) キャンパスパートナーシップを結んでいる青山学院大学文学部の学生1名に対し、学芸員が博物館実習を行った(6月16日～6月24日)。

f) スクールパートナーシップを結んでいる東京都小石川中等教育学校の中学2年生2名に対し、学芸員が対応して職場体験を行った(11月26日、1月27日)。

g) インターン制度を設け、第一期(5月から8月まで)3名、第二期(10月から1月まで)3名を受け入れ、学芸員が対応して就業経験を行った。

h) 文京区の「文の京ミュージアムネットワーク」の合同イベント「文京ミューズフェスタ」(各施設による展示・体験コーナー、PRポスター、パネル等の掲示)での展示をインターン生と共に行った(於・文京区役所1F、12月17日)。

7. 博物館連携

静嘉堂文庫との連携展示として、下記の美術品の借用展示を行った。

・『三彩獅子』　唐時代(8世紀)　1対(2体)

・『色絵五艘船文鉢』　江戸時代(18世紀前半)　1点

8. 入場者数

2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
入場者数	2,938	2,245	2,161	2,838	2,729	2,127	2,705	3,431	4,001	1,624	1,934	3,097	31,830

E. 広報普及

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 要人の訪問

a) リュック・リーバウト駐日ベルギー大使夫妻、駐日エチオピア大使、駐日パキスタン大使、Morgan Stanley 日本代表、駐日ウズベキスタン大使、駐日メキシコ大使、他。

2. 関連書籍の刊行

・『東洋文庫善本叢書』 第 7～12 巻(勉誠出版刊、全 12 巻)

・『東インド会社とアジアの海賊』(勉誠出版刊)

3. 報道実績

ミュージアムに関しての報道実績の主なものを以下に挙げる(50 音順)。

新　聞:『SANKEI EXPRESS』、『産経新聞』、『東京新聞』、『読売新聞』など

雑　誌:『マンスリー三菱』など

テレビ: テレビ東京『L4YOU』(2015 年 11 月 3 日放送)にて、東洋文庫ミュージアムが紹介された。

ラジオ: 『NHK ラジオ深夜便』(2016 年 2 月 8 日放送)にて、岡崎礼奈研究員が「解体新書展」について紹介した。

4. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

5. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信している。

6. 近隣の中学・高校とのミュージアム・フリーパス連携

a) 小石川中等教育学校とのミュージアム・フリーパス連携を引き続き締結した。

b) 筑波大学付属高等学校 3 年生に対し、スクールプログラムに基づき展示案内を行った他、学芸員がレクチャーを実施した(7 月)。

c) 神田女学園中学・高等学校　地理歴史部に対し、スクールプログラムに基づき顧問、部員に展示案内を行った他、学芸員がレクチャーを実施した(9 月 8 日)。

7. モリソン文庫調査委員会

2017年にモリソン文庫渡来100周年を迎えるに当たり、モリソン文庫調査委員会をたち上げた。2017 年に調査を踏まえた出版と展示を予定している。

8. 日本学士院賞の受賞

元文庫職員であった志茂碩敏研究員が日本学士院賞を受賞した。

9. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民向け講座を下記のとおり実施した。

講座名	講師(所属)	期間	人数
中国の考古学入門	飯島武次(東洋文庫研究員・駒沢大学名誉教授)	4/1-7/22	5
モンゴル帝国を継承したロシアと中国	宮脇淳子(東洋文庫研究員・東京外国語大学非常勤講師)	4/7-6/30	11
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子(トルコ細密画専門家)	4/13-6/22	6
GE モリソンの中国・アジア紀行と東洋文庫の紀行記からみる 20 世紀初頭の中国とアジア	濱下武志(東洋文庫研究部長)	4/23-4/30	8
妙法蓮華経	會谷佳光(東洋文庫)	4/25	12
動く香港、動く九州	濱下武志、古田茂美(香港貿易発展局日本主席代表)	4/24-5/1	9
フェルメールも描いたブラウの大地図帳の世界	牧野元紀(東洋文庫)	4/26-8/9	27
日本国家成立の真実	井上和人(東洋文庫研究員・明治大学特任教授)	5/16-7/11	8
中東・イスラーム世界の現在を歴史から読み解く	三浦徹(東洋文庫研究員・お茶の水大学教授)、保坂修司(日本エネルギー経済研究所研究理事)	5/12-6/2	16
古代インドの神秘的合理思想	志田泰盛(京都大学白眉センター特定助教)、堀田和義(大谷大学任期制助教)、加藤隆宏(東京大学大学院助教)、近藤隼人(東京大学大学院博士課程)、岩崎陽一(日本学術振興会特別研究員)	5/13-7/8	6
ペルシア語の世界・中級編	渡部良子(東京大学非常勤講師)	5/15-7/24	9
難しくて楽しいアラビア語入門	柳谷あゆみ(東洋文庫研究員・早稲田大学非常勤講師)	6/30-7/21	6
ペルシア書道に親しむ	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	6/6-9/5	2
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	7/13-9/28	3
初歩の文人画	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	9/12-11/28	9
ペルシア語の世界・初級編	渡部良子	9/30-12/16	6
ペルシア書道に親しむ	角田ひさ子	10/3-12/19	3
ジョン・セーリスの「日本渡航記」について	平野健一郎(東洋文庫普及展示部長)	10/3	13
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	10/5-12/21	5
ことばの塾「中国古代の文字とことば」	内山直樹(千葉大学准教授)	10/18	9
魏志倭人伝	清水信子(二松学舎大学非常勤講師)	11/28	10

ビデオ人類学から見た東アジア社会	末成道男(東洋文庫研究員・東京大学名誉教授)	1/6-2/3	4
ペルシア語の世界・中級編	渡部良子	1/8-2/19	6
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	1/11-3/28	4
読解のための韓国語漢字語・漢字音講座	伊藤英人(東京大学非常勤講師)	1/13-2/17	5
モンゴル帝国を継承したロシアと中国	宮脇淳子	1/16-4/2	9
初歩の文人画講座(人物画篇)	伊藤忠綱	1/23-4/9	10
現代中国理解セミナー	村田雄二郎(東洋文庫研究員・東京大学教授)、阿古智子(東京大学准教授)、中村元哉(東洋文庫研究員・津田塾大学教授)	2/1-3/7	18
60 歳をきっかけに考える「自分史・家族史」入門	宮野真有(自分史活用アドバイザー)	2/3	4
イラン芸術　ペルシア書道に親しむ	角田ひさ子	2/6-4/16	6
鄭和の航海図　15 世紀アジアにおける東西交流の軌跡	日野康一郎(早稲田大学非常勤講師)	2/27	9

F. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1)外来研究員の受入

ダヴァン・ディディエ (フランス国立極東学院 東京支部長)
「中世における臨済宗」
(2015 年 4 月 1 日～2015 年 12 月 31 日[延長]、2016 年 1 月 1 日～2016 年 3 月 31 日)

蘇 基朗 (香港科技大学 教授)
「近代化のための実業・法律・教育」
(2015 年 6 月 1 日～2015 年 8 月 9 日) [受入担当:斯波 義信]

蘇 寿富美 (George Mason 大学 副教授)
「近代化のための実業・法律・教育」
(2015 年 6 月 1 日～2015 年 8 月 9 日) [受入担当:斯波 義信]

Mehmet Olmez (トルコ ユルドゥズ工科大学 教授)
「トルコにおける古ウイグル語文献研究」
(2015 年 7 月 1 日～2016 年 3 月 31 日) [受入担当:梅村 坦]

呉 真 (中国人民大学 中文系 副教授)
「中国古代戯曲演劇史」
(2015 年 7 月 1 日～2015 年 8 月 28 日、2016 年 1 月 12 日～2016 年 2 月 22 日)
[受入担当:田仲 一成]

施　愛東（社会科学院　文学研究所　研究員）
「中国民俗学」
（2015年7月8日～2015年8月28日）　［受入担当：田仲　一成］

許　愛珠（南昌大学　中文系　教授）
「中国古代文学：明代戯曲史」
（2015年9月1日～2016年3月31日）　［受入担当：田仲　一成］

徐　冲（復旦大学　歴史学系　副教授）
「歴史叙述よりみた漢晋間における官僚秩序の変革」
（2015年9月20日～2016年8月20日）　［受入担当：窪添　慶文］

Joseph P. McDermott（東洋文庫　名誉研究員）
「明代社会経済史」
（2015年12月2日～2015年12月14日）　［受入担当：斯波　義信］

(2)2015年度日本学術振興会特別研究員PD・RPDの受入
玉味　知子（慶應義塾大学大学院PD）
「17～19世紀中国基層社会における規範とジェンダー」
（2013年度採用、14・15年度・3カ年間）　［受入指導者：岸本　美緒］
※2016年3月31日をもって身分を終了

阿部　由美子（東京大学大学院PD）
「旗人から満洲族へ―20世紀中国理解への新たな視座」
（2014年度採用、15・16年度・3カ年間）　［受入指導者：松重　充浩］

河野　正（東京大学大学院PD）
「1950～60年代、多地域比較による華北農村社会の変容に関する研究」
（2014年度採用、15・16年度・3カ年間）　［受入指導者：内山　雅生］

関　智英（東京大学大学院PD）
「戦時期中国人対日協力者（和平陣営）の戦後の活動と思想」
（2015年度採用、16・17年度・3カ年間）　［受入指導者：久保　亨］

濱本　真実（東洋文庫研究員）
「近代ユーラシア陸上貿易におけるタタール商人の活動とその文化的影響」
（2014年度採用、15・16年度・3カ年間、RPD）　［受入指導者：小松　久男］

(3)2015年度東洋文庫奨励研究員の受入
小林　晃（2015年度採用、就職につき終了）

2. 外国人研究者への便宜供与

Belgium	BAUDEN, Frederic［Professor, University of Liege］
China	李零［北京大学教授］（ほか2名）
England	FERENTE, Serena［Dr. King's College London］（1名）
Iran	Morteza Damanpak Jami［Deputy Head, Center for International Research and Education of the Ministry of Foreign Affairs］
Korea	金秉駿［韓国ソウル大学校教授］（ほか1名）
Lithuania	GLOSAITĖ, Julija［Marketing Manager, Central Library of Vilnius

	City Municipality]
Mongol	SAMPILDONDOV Chuluun [Director, Mongolian Academy of Sciences Institute of History] (ほか 1 名)
Russia	BOBROVNIKOV, Vladmir [Professor, Institute of Oriental Studies] (ほか 3 名)
Taiwan	黄寛重 [中央研究院歴史語言研究所研究員]
USA	ELLIOTT, Mark C. [Professor, Harvard University] (ほか 11 名)
Vietnam	NGUYEN Huu Mui [ベトナムハンノム研究院副所長] (ほか 3 名)

VI. 地域研究プログラム

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進と史資料学の開拓」

国内主要図書館における現地語史資料の所蔵と整理の状況、インターネットを含む検索・利用環境、そして研究の動向などを総合的に踏まえた上で、現地語史資料の体系的収集を継続し、共同利用を促進する。調査やアラビア文字資料司書連絡会等で得た情報や要望に基づき、現地語史資料の整理・書誌データ作成のための資料や補助ツールの作成と公開、「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の編集をはじめとする関連データベースの拡充、国内・海外の現地語史資料の概要が把握でき、検索が容易になるような情報を収集し、逐次ウェッブサイトなどを通じて発信を行う。また、史料研究について、原典講読会および国内研究機関との連携による研究活動を実施し、研究情報の共有と若手研究者の育成をはかる。これらによって、史料および研究文献の収集と整理(情報化)と利用の 3 つの局面を連結したサイクルを築き、国際的な共同利用にむけた環境改善をはかる。

[研究実施概要]

a) 現地語資料および欧文研究書等の収集を行うとともに、整理に力を入れ、これまでに NACSIS-CAT に登録した書誌の見直しを行った。「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の 1,000 件のデータ更新を行い、イスラーム地域をめぐる国際情勢の変化にも対応した最新の文献情報の公開を行った。「卒論を書くための情報検索リテラシーセミナー」に代わり、ウェブサイト上で現地語資料の検索法を解説する「イスラーム地域研究　現地語資料の探し方(2015 年版)」および検索スキルをチェックするクイズを公開し、イスラーム地域研究プログラム終了後も学生が現地語資料の検索法を学ぶことができるようにした。また、アラビア文字資料司書連絡会を開催し、メーリングリスト等により図書館担当者のネットワークの維持をはかることとした。

b) 史料研究では、シャリーアと近代研究会は、8 回の研究会を開催し、オスマン民法典第 3 編(保証)の訳を終えるとともに、第 1 編(売買)の訳を見直し、3 月に『オスマン民法典(メジェッレ)の研究　売買編』(大河原知樹・堀井聡江・シャリーアと近代研究会編)として刊行した。また、「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」研究会、近代中央ユーラシア比較法制度史研究会、オスマン史研究会、オスマン文書セミナー、中央アジア古文書研究セミナーを開催し、文書史料を用いた研究の推進と学生や若手研究者の育成を図った。IAS 第5回国際会議でセッション「The Shari'a Courts and the Imperial Ruling System」を主宰し、ワクフに関する国際シンポジウムを東洋文庫で開催したほか、合同集会「地域を知る、歴史から考える:交差する中東・南アジア・中央アジア」の企画を行い、史料研究の国際的なネットワーク形成と一般への普及に成果をえた。

B. 現代中国研究資料室

「日本における現代中国資料の情報・研究センターの構築:
資料の長期的分析による現代中国変容の解明」

東洋文庫所蔵の現代中国関係資料につき、解題、目録やデータベースの作成などの形で利用の促進を図る。また、現代中国関係資料を所蔵する国内諸機関との連携を強化し、現代中国関係資料の系統的・効率的収集のための情報交換を行う。海外における大型資料やデータベースの公開に関わる情報を収集し、必要に応じて共同購入・共同研究を行う。また事業計画 4 年目にあたる 2015 年度は、これまでの資料研究活動の成果を、論文集・資料解題などの形で公表していくことに重点をおく。

[研究実施概要]

a) 資料利用環境の整備および国内外諸機関との連携については、国立情報学研究所との連携により NACSIS-CAT への書誌登録を継続して行った。本年度中に約 1,200 タイトルの東洋

文庫近代中国研究委員会(現・近代中国研究班)収集資料および現代中国資料が登録され、登録タイトル数は 57,000 件あまりとなった。

b) 電子図書館についても、引き続き拡充に努めた。画像をインターネットで完全公開している資料は 586 タイトル、公開画像数は 51,000 画像あまりに増加した。また、利用環境の向上を継続した。

c) 資料研究活動については、5 つの研究班のもとで活発におこなった。研究班体制の四年目として、過去三年間の実績をもとに、他機関・他大学との共催も含めて計 14 回の研究会・シンポジウムが開催された(江南地域社会班 6 回、図画像資料班 1 回、ジェンダー資料班 3 回、政治史資料班 2 回、1950 年代史料班 2 回)。

d) 活動の成果として、中国ジェンダー史の基本英文著作の翻訳『性からよむ中国史——男女隔離・纏足・同性愛』、論文集『ジェンダーの中国史』、近代中国の知識人が残した手書き日記の一部を活字化し注釈をつけた「王清穆『農隠廬日記』(5)」(『近代中国研究彙報』所載)を公刊した。また 2014 年度公開の「『亜東印画輯』データベース」を人間文化研究機構の統合検索データベースと連携させることで検索方法を多様化し、利便性を向上した。さらに東洋文庫研究部と共同で、東洋文庫に所蔵される原資料の解題つき目録『東洋文庫蔵汪精衛政権駐日大使館文書目録』を公刊した。

e) 最終年度たる 2016 年度にも、各研究班の活動をもとに研究入門、論文集、基本史料解題等の出版や、写真展の開催、データベースの拡充などの形態で成果公表が予定されており、本年度の活動によってそれらの公表に目処をつけた。

2015年度公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人　東洋文庫
理事長　横原　稔

2015年4月1日から2016年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業報告の概要は下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費助成事業

1. 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業
「東洋学電子図書館情報システム」
[東洋文庫電算化委員会委員長:斯波義信]

「日本における中東・イスラーム研究文献目録データベース 1868-2015」
[研究代表者:三浦　徹]

「中國鎮魂演劇研究」
[研究代表者:田仲　一成]

2. 基盤研究等の対象事業
(1)「ワクフ(イスラーム寄進制度)の国際共同比較研究」
[研究代表者:三浦　徹]
(基盤研究(B)、2013年度採用、4ヶ年間・第3年度)

(2)「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」
[研究代表者:本庄　比佐子]
(基盤研究(B)、2015年度採用、5ヶ年間・初年度)

(3)「宋～明代日用類書の基礎的研究」
[研究代表者:大澤　正昭]
(基盤研究(C)、2015年度採用、4ヶ年間・初年度)

(4)「ジャウィ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」
[研究代表者:坪井祐司]
(若手研究(B)、2012年度採用、4ヶ年間・最終年度)

(5)「宋・元・明時代における江南中国の支配と変容」
[研究代表者:小林　晃]
(若手研究(B)、2015年度採用、3ヶ年間・初年度)
※2015年10月、就職のため転出

以上